

廣益俗說辨尤

殘編

地理 俗諺 居處
佛家 文字 禽鳥
魚蟲 艸木

13

954

20

廣益俗說辨義編四十目錄

○士庶

補 楠正儀足利家ノ降参ノ役

補 宇野熊王丸楠正儀と狙ふ説

補 細川頼之丹波山國ノ蟄居の役

○婦女

補 鹽谷高貞が妻の役

補 新ノ金焼セー女の役

○僧道

補

釋道公ニシテノトコウ繪馬エウマの汁ジュと足タラシふ足タラシ

廣益俗說辨殘編四十

肥後隈木

井澤節長秀輯錄

○士庶

補

楠クスノキ正儀マサノリ足利家アスカガノ降糸オウサの役

俗間^{イニニウ}中^{ナカ}の書^{シヨ}ふ。楠正成^{シゲナガ}は。正成^{シゲナガ}が次男^{ジキナン}にて。正成^{シゲナガ}
が弟^{ケイ}あり。父兄^{フケイ}より教^{アト}を授^{タテマツル}けりて。忠貞^{チュウセン}といへば
かゝる君^{キミ}を恨^{ウラ}みたりて。足利家^{スズキヤ}に降^{コノゾク}ふと。

今按ふ非なり。じ從是利治元記。チラン不クハ當エイ三代紀。エン園大曆記。レキ梅ハイ松ハシ論。南朝記多ふりて
見ミるニ何ナニぞ據ヨリて記キすニと尋タツスルんニ兒女ジゴ其モチアツベ體テイる

三人は師といつゝ草子に。楠正儀君と恨
まなりて。是利家と縁糸さんといふ人あり。紙
家長條。六郎右衛門といふもの。あゝと
いふも。少引せり。いふは。徳うひて。通世と
わうふ。平はまゝなり。や。是大人なり。仍なり。
孟子と盡信書不如無書とのさる人あり。
何故し書生多き。多き法実録。は。擧ぐ
して三人は師七人。比血尼。彰。引。徳。一
り。よの忠長。勇。才。成。わくのおく。蕪。藏。と
や。ち。歎。ぐ。べ。い。げ。い。儀。は。始。終。う。ろ。を。愛。さ。ん

千。劍。破。城。を。い。て。病。死。さ。り。後。を。平。記。曰。
永。德。二。年。正。月。楠。正。儀。守。病。に。わ。り。た。れ。死
を。待。た。ず。な。り。し。時。其。子。正。勝。正。元。を。呼。び。
我。父。の。遺。訓。を。守。り。て。た。我。を。励。ま。し。め。た。
何。し。と。い。ふ。て。其。功。な。く。今。あ。い。ふ。は。り。海。を。
相。つ。ま。ん。て。芳。野。殿。に。對。し。一。令。と。た。義。の。め
り。推。べ。い。と。其。志。成。り。と。い。ふ。と。あ。い。ふ。と。
返。も。と。く。遺。言。し。て。移。り。卒。し。と。い。ふ。と。
宇。智。能。王。丸。楠。正。儀。を。相。人。説
俗。説。云。大。ま。判。官。光。教。接。は。團。を。あ。り。て。楠。正。儀。と

我いへに。先教が家人宇野六郎といふ者討た。六郎の子惣王丸。先教ふりきりには。桂西儀いふが。歌ふいへ。河内へ遊ぐ。西儀は事人いふなりて討。しとらむ。先教うのちうと感て。常ふ所をいふおろ刀を。惣王に得てせう。かくは惣王赤坂の城より。とくをいふ。西儀みけふ。十六七よりいふ。西儀え服せう。和田和泉守いふ。西儀え服せう。西儀と。早も。太刀珍敷より賜う。徳と得。けまば。惣王涙を袖より。とくをいふ。西儀入。まて。

西儀が。先教が。家人宇野六郎といふ者討た。六郎の子惣王丸。先教ふりきりには。桂西儀いふが。歌ふいへ。河内へ遊ぐ。西儀は事人いふなりて討。しとらむ。先教うのちうと感て。常ふ所をいふおろ刀を。惣王に得てせう。かくは惣王赤坂の城より。とくをいふ。西儀みけふ。十六七よりいふ。西儀え服せう。和田和泉守いふ。西儀え服せう。西儀と。早も。太刀珍敷より賜う。徳と得。けまば。惣王涙を袖より。とくをいふ。西儀入。まて。

性生定してはと久正實法師と号したる
いふ事多。所よりくる。之教が得させふ刀
を伴のふ。くく書保て。古郷へそく
しき。いふれなりし事もあり
今按どうふ。然るに丸又が歌と付んがふと
いふて。正候はけふ事。其非なり。この
故に。進で鎌言と後さんととれ。君氏裁
とりの理はよ。退く卿は帰んとすれ
ん。言ふ人言ふ恥をさうり。むやむじ角やと。
莫後のめく。狼狽。終は己が髪を剃る。

わづや浮屠は帰る。其あるふや
べ。彼のふ。お。今怯弱の徒。以佛道
為途場。何ぞや。それ。佛経。棄恩入
無為。真實報恩者。從。禪歸。父母為
人所殺。無一。心。初念。方始。名為。初念
心。菩薩といふ。耳心。し。なり。想。士
人者。幼より文武と保。是。強
感。こ。さ。人。と。強
退。辞。保。を。つて。義。武。勇。を。つて。
父兄。め。を。お。く。一。事。乃。わ。く。

ものなり。かたて家系法實録一所見は。
ゆゑ義満父祖の徳とて。大樹れ位に
依りて。いまだ幼稚なり。討文
南方平治を。畿内近國。東至西國。乃
官方。氣公令。何れも。天下れ危と
事。累卵の如し。あつた。わづらひ。幼
君と。強し。金。母。波。引。こ。り。暗。然
して。塾。居。し。を。ぬ。り。や。その。仍。知。れ。
家傳曰。教之。以為。終。人。周。極。思。く。ハ。禍
れ。身。よ。乃。ん。て。成。る。い。後。成。る。ゆ。て。も。成

乞ふ。ば。附。頼。之。の。詩。一。海。南。行。人。生。五。十
愧。無。功。花。木。春。過。夏。已。中。滿。室。蒼。蠅
掃。難。盡。去。尋。禪。榻。卧。清。風。○。頼。之。祠
堂。記。曰。嘉。慶。年。中。義。満。公。外。議。如。詣
嚴。寫。神。祠。一。見。今。川。了。俊。日。記。枉。道。入。讚。州
訪。公。起。居。問。以。天。下。政。勢。且。謁。三。顧。之
情。公。不。獲。已。再。諾。公。命。越。年。入。洛。や。わ
る。を。證。と。す。べし

○婦女

補 鹽谷高貞が妻の況

信從之鹽谷判官高貞が妻ハ。先帝セニテイ後醍醐コタキ天皇テウより賜タマヒまり。高師直カウモロナリより賜タマヒまり。及妻子僕従ヒサイレカウあり。之を教コホさる

今按アタる小。太平記。後醍醐コタキ天皇テウ深波フキ四
一書曰依々本五郎義清
未孫○系圖ニ所見
綱ツテ属ミヤ下シタ申ウケを女メ家カ以ヨリて。妻ウツく。其ソノ公キミ
と。敵テキ感カンす。官女クニメを義綱ヨシツネめをす。
友名トモナ一族イツクをわする。山ヤマ雲クモにけり。
を。鹽谷シホヤ判官高貞タカサダ友名トモナ氏ウヂ押オシへ。至いたて。深波フキ

い。歸カヘる。記キし。わね。鹽谷シホヤ後醍醐コタキ天皇テウより賜タマヒまり。官女クニメと賜タマヒまり。其ソノ事コトも。同書鹽谷シホヤ諺コトワザ死シの辰タビより。高貞タカサダが妻ウツハ。先帝セニテイより賜タマヒまり。右ミダリの記キと相違サカサマと。中ナカより官女クニメを賜タマヒまり。藤名フジナと。友名トモナが死シ後ノチ。鹽谷シホヤ氏ウヂ毎スベテ家カより。のち。へ。顔ツラより金焼カナヤキせ。女メが死シ後ノチ。信從シノト之ノ。洛陽ラクヨウの者モノは妻ウツ。佛道ブツドウ

又母の遺體^{タイ}は金^{カナ}やたとうきやいあらぐま。
 佛も西方^{セイフヤ}れ賢者^{ケンシャ}ときけい。不孝^{フカウ}不貞^{フテイ}の
 人を容^{イル}べうに。但^{タバ}し人ありてうふふるま
 い^{フツ}佛^{ホウ}はよううつうといふ。佛は神あり
 まゝのいせは作^スへい

○僧道

補釋道公繪馬神を以て從

俗説云ひく。石をとりて僧。紀伊^{キノ}四^{クニ}より。枳^ツ律^リ國^{クニ}より。ありて。ありて。村を通る。ふ。そのまゝに。屋^イ宅^エなり。大なる樹^{キノ}下^{モト}に宿^{シヨク}と。夜半^ハなり。ふ。驍^{キノ}馬^バの

よの三十餘人ありて。翁ありやと問。ありやと答。又問。なんぞせむや。翁がいはく。我年をむて歩ゆ。りかづと。御父馬乃足といふありといふを。騎るの者皆さへり。翌旦道公梅下と免ぐり見ふ。小祠ありて。半はくもさる。翁は。経馬あり。前足のところ破まじり。道公さるる系をりて。けむとせむといふ。神は。あまふ。次乃夜に狐梅下に宿と。又翁を。ふと。翁の騎馬の者ありと。翁を呼。翁る。り。騎る。さる。い。ゆ。曉。翁。翁。久。と。て。

廣益俗說辨殘編四十一目錄

○雜類 地理

補 上総國下総國れ從

補 常陸國乃從

補 筑前國筑後國の從

補 豊後國れ從

補 兵庫縣乃從

補 河波鳴門の從

補 後河内縣機上乃從

補 陸奥千咲魚の從

下枝のうしろをト総と

今按る非なり。右語拾遺曰。天富命更

求沃壤分阿波部率往東土播殖麻

穀好麻所生故謂之總國穀本所生謂之

結城郡。註曰。古語麻謂之總。今為上總

下總二國是也。同書句解曰。結城郡在下

總考へるなり

○常陸國の記

信託云常陸は比國。あふさく入らて國

民のまゝといふなり。信託云常陸國といふは

といふなり

今按る非なり。常陸風土記曰。是國通路

相望。郡郷接壤無江海之隔。無津濟之

難。峯谷開路相通。名曰常陸國。釋曰。あ

を常陸國誌といふなり

補 常陸國後國の記

信託云崇神天皇紀伊の國より最北に

筑紫の地をくぐりて海に不知火を

くぐりての最北に筑紫といふ後

はくところを筑後といふ

今按ふに非なり。筑後風土記曰。筑後國者平
 与筑前國合為一國此兩國之間山有峻嶺
 坂往來之所駕鞍韉被摩盡土人曰鞍
 韉坂釋曰 古之鞍韉と摩盡といふ
 名なり。筑紫と名づくも後より國に分れて
 筑前筑後と名づくやなり
 篤信集石と辯とあり 自撰集一とあり 實に贅と云

補 豊後國の役

倭臣云。昔々豊後ハ崇神天皇の國ハ大
 内裏を以て修む。此國ハ倭より一のりて

都と西へいきて多々ふ。前ハ宮づくの所
 多々あり。後ハ宮づくれ所を豊後と云

今按ふに非なり。豊後風土記曰。豊後國
 者。本與豊前國為一國昔纏向日代宮
 御宇大足彥尊 景行 詔豊國直祖菟名
 手遣治豊國。往到豊前國中臣村干時
 日晚止宿明日昧夾忽有白鳥從北飛
 來翔集此村其鳥化為餅片時之間更
 化茅草數千許株花葉冬榮菟名手
 見之為異歡喜云。化出之茅所未曾有

見實至德之成乾坤之瑞既而恭上朝
 庭舉狀奏聞天皇勅菟名乎曰天之瑞
 物地之豐草汝治國可謂豐國重賜
 姓曰豐國直因曰豐國後分兩國次豐
 後國為名（ナト）於此（ナト）考へんがごとく

補 兵庫の築所の役

保佐之松津國矢田部郡兵庫築所へ平相
 國清並けりて築くところなり。そのりて築
 きぬるべし。大風ぬおる。潮さうのちりて
 うるべし。の蒼海とあり。うけるよりあり。

阿波民部大補重能なりて。けまの老。三松
 人をのちり。海彦めちりて。成就さん
 へん。か。ね王丸とて。老。うを。ふ
 ぬ。と。う。人。の。令。り。て。一人海
 へ。ひ。ね。ね。の。文。字。紙。書。家。
 授。これと築く。應保元年七月十二日
 す。ふ。り。兵庫の築所も。経。つ。と。
 名。だ。り。近。上。年。の。事。人。ね。と。り。つ。
 ち。り。は。わ。り。と。り。と。り。と。り。と。
 今。接。り。清。並。を。築。く。な。り。と。り。

付^{ツキ}水の者^{モノ}は^カ擲^ナて^シ海^{ウミ}に^シ沈^シんで^シる^ナ。
 ね^ミと丸^マく^カね^ミて^シお^シび^ミど^ミ。^ミ己^ミが^ミ身^ミと^ミして^ミね^ミ。
 人^ミは^ミ代^カら^ミんと^ミら^ミう^ミと^ミ。^ミ何^{ナニ}の^ミ思^シ惟^{ユイ}も^ミな^ミく^ミ。^ミ水^ミ
 り^ミ投^トぎ^ミし^ミ事^ミ。^ミ罪^ミ惡^ミり^ミつ^ミと^ミと^ミ甚^ミし^ミ。^ミ一^ミ不^ミ
 義^キを^ミ約^ミひ^ミ。^ミ一^ミ不^ミ辜^ミと^ミ殺^ミして^ミ。^ミ天^ミ下^ミと^ミ獲^ミる^ミ
 も^ミと^ミい^ミ。^ミい^ミん^ミや^ミ衆^ミ多^ミと^ミや^ミ。^ミ沈^ミんで^ミい^ミ。^ミさ^ミに^ミ
 今^ミ已^ミなん^ミ。^ミ因^ミて^ミサ^ミし^ミ。^ミ聖^ミ宋^ミ拾^ミ遺^ミ曰^ミ。^ミ昔^ミ齊^ミ
 景^ミ公^ミ之^ミ時^ミ。^ミ天^ミ下^ミ大^ミ旱^ミ三^ミ年^ミ。^ミ上^ミ之^ミ曰^ミ。^ミ必^ミ以^ミ人^ミ
 乃^ミ雨^ミ。^ミ景^ミ公^ミ下^ミ堂^ミ。^ミ頓^ミ首^ミ曰^ミ。^ミ凡^ミ吾^ミ所^ミ以^ミ求^ミ雨^ミ
 者^ミ。^ミ為^ミ吾^ミ民^ミ也^ミ。^ミ今^ミ必^ミ使^ミ吾^ミ以^ミ人^ミ祠^ミ。^ミ乃^ミ旦^ミ雨^ミ

寡人將自當之言。未畢而天大雨水。方千里。とわり。人の君として。はぐくむを怠るべし。清き水。うけし。似氣なくて。生涯人と教と。いふ。嗜む。あはれ。天罰踵とせ。うき。一族。うき。く。新滅。及ぶ。其報。さ。嚴なり。うれ。

蝦夷之時遭野火此山避其旁既尊深
志專守倭姬命之神教仍之以栲幡千千
姬祭此山合之以稚日女尊志津姬之名
卒女功依兩神之名與其功業而號之
とあり公考へ知へ

補陸奥千咲原の役

俗伝云。ある歌書云。みづのへるふちをさへみ
負は。うのへる坂と田村麻呂を名をいへり
今もあまふと残る
今移り。田村麻呂はあふ。城長衣なり。

會津風土記曰。千咲原在河沼郡壽永
年中。越後城四郎長茂衆二十八館于
勝川莊藤村宇内村。齊遺趾焉。此原
長茂與其妻竈御前遊觀之地也。當
時裁千種芍藥。至今滿原皆芍藥而
呼千咲原。芬芳遠聞。故其南曰香原
東北有袋原。形如袋。有竈塚。有御前
清水。有沼々。中有洲。夫妻宴于此。曰
舞臺沼。東南有經塚。相傳竈使極樂
寺僧侶無經有石封之。今原上之石時

見^{ミル}文字云。○會津四家合考附錄曰。今考^カ河莊^{カノセウ}宇内^{ウチノ}村^{ムラ}藤村^{フジノ}共有^ニ古^コ墨^{スミ}存^ス以^テ今^{イマ}考^カ藤村^{フジノ}行^{ユク}越^{エツニ}別徑^{ベツキョウ}也。宇内^{ウチノ}邊^ヘ亦^モ行^{ユク}越^{エツニ}本道^{ホンミチ}也。今^{イマ}宇内^{ウチノ}村^{ムラ}北^{キタ}六七里^ニ有^ニ千^チ開^{カイ}原^{ゲン}以^テ爲^ス藥^{ヤク}多^タ種^{シュ}得^{タリ}名^ナ也。此^{コノ}原^{ゲン}東^{ヒガシ}北^{キタ}二^ニ三^ニ里^ニ有^ニ袋^{フクロ}原^{ゲン}此^{コノ}有^ニ竈^{カマド}塚^{ツカ}御^ミ前^{マエ}舞^{マシ}臺^{ダイ}沼^{ヌマ}等^{トウ}之^ノ陳^{チン}跡^{セキ}傳^{デン}曰^{イハレ}。每^{コトニ}春^{ハル}花^{ハナ}時^{トキ}長^{ナガ}茂^{モチ}携^{タツク}於^ニ婦^{メノ}人^ノ竈^{カマド}御^ミ前^{マエ}遊^{ユウ}千^チ開^{カイ}原^{ゲン}又^{マタ}遊^{ユウ}袋^{フクロ}原^{ゲン}歌^カ舞^{マシ}云^{イハレ}。如此^{コノ}則^{ナラバ}竈^{カマド}者^ハ恐^{オソ}奴^ヌ女^{メノ}而^{シテ}長^{ナガ}茂^{モチ}妾^{メカ}乎^カ以上^{イサナ}事^{コト}跡^{セキ}是^{ナリ}長^{ナガ}茂^{モチ}每^{コトニ}春^{ハル}出^{イデ}越^{エツニ}巡^{メグル}換^{カヘ}杉^{スギ}封^{ホウ}疆^{キョウ}而^{シテ}到^{イデ}此^{コノ}可^カ有^{ナリ}

此事也。とあり。考へるに、

補

下野^{シモノ}室^{ムロ}八^ヤ嶋^{シマ}乃^ニ從^シ

俗^{ソコ}從^シ云^{イハレ}。下野^{シモノ}國^{クニ}室^{ムロ}八^ヤ嶋^{シマ}ハ。佐^ソ若^ノ者^{カミ}八^ヤ嶋^{シマ}大^{オホ}嶋^{シマ}と
いふ人^{ヒト}存^{ゾリ}セ。より其^{ソノ}名^ナを得^エたり

今^{イマ}按^{アタ}ず。非^ヒなり。室^{ムロ}八^ヤ嶋^{シマ}ハ。上^{ウヘ}古^コ本^{ホン}記^キ
開^{サク}邪^ヤ娘^{ニメ}云^{イハレ}。戸^ウ室^{ムロ}八^ヤ嶋^{シマ}は。くろく。あり。後^{ノチ}に
一^{ヒト}舊^{キウ}跡^{セキ}あり。和^ワ奇^キ小^コ嶋^{シマ}と。より。も。そ。戸^ウ
室^{ムロ}ハ。火^ヒを。移^{ヒナ}ら。後^{ノチ}に。一^{ヒト}故^コ事^ジに。よ。り。ハ
寫^{オハ}ハ。大^{オホ}八^ヤ嶋^{シマ}を。表^{ヒラ}さ。り。開^{サク}邪^ヤ娘^{ニメ}乃^ニ神^{シヤ}社^{シャ}
あり。羅^ラ山^{サン}文^{モン}集^{シツ}曰^{イハレ}。室^{ムロ}八^ヤ嶋^{シマ}池^チ中^{ナカ}有^ニ八^ヤ嶋^{シマ}

祭八神考神代卷曰故皇孫就而留
住時彼國有美人名曰鹿葦津姬
神名曰葦津姬名曰鹿葦津姬
女子耶對曰妾是天神娶大山祇神所
生兒也皇孫因幸之即一夜而有娠皇
孫未之信曰雖復天神何能一夜之間令
人有娠乎汝所懷者必非我子歟故鹿
葦津姬忿恨乃作無戸室入居其內
而誓之曰妾所娠若非天孫之胤必
當隳滅如實天孫之胤火不能害即故

火燒室始紀煙末生出之兒號火爾降
命是隼人等次避熱而居生出之兒號
彥火々出見尊次生出之兒號火明命
是尾張連九三子矣○藤原成天書曰既
而皇孫遊行之狀耀照令六合為八坂
瓊玉之光則自櫛比之蓋上之天浮橋
立於浮渚在平處而齊完乃為主國
自領岡負國求里行幸為止御故著
御於吾田長屋笠校之碕其人魁號
事勝國勝長校待皇孫之行幸仍之

皇孫勅二神二問曰。自此以下在何國耶。留
矣。此有國請任勅意遊御故皇孫留
御其地于時有國之色人曰鹿葦津比
咩亦名木花開耶姬。皇孫任敵御精
々焉。依之勅曰汝乙女誰女子耶於此國
有此色者宜雖天神不知此矣對曰妾
是地祇大山祇之神子也皇孫暫御此
女幸之一夜即有娠。皇孫因之始且此
不信宸慮無分曰雖天神之造功何能
一夜之間如斯有娠乎汝所懷者必非

我子也。歟。故鹿葦津比咩乃作八咫無戸
室堀八咫之徑入居其内誓曰妾所娘
若非天孫之子者必當成灰爲水如
實天孫之子雖火敢不害雖水敢不溺
即放火燒室火將二方時生火圍送命
火將三方時出誕彥火々出見尊。伊勢
朝熊社。後河。面士。淺間社。皆開耶娘を
まつれり。伊勢諸神記曰。朝熊ハ本花園
耶娘乃別名。芦津娘の通音なり。あ
あ。五音通。ほ。ろ。通。む。ろ。故。今。乃。俗

十一

曰。伊賀國始屬伊勢國。清見原天皇天武天皇

吾飢

1

凡河内古事記
今河内今河内

歌斐續日本紀
今甲斐今甲斐

阿波同書
今安房今安房

淡海舊事記
今近江今近江

斐陀舊事記
今飛騨今飛騨

上毛野舊事記
今上野今上野

下莞毛古事記
同

越日本紀
同

但波鎮座傳記次第記
元々集今丹波

但遲麻舊事記
今但馬

島津舊事記
今志摩

相武舊事記
今相模

淡日域本紀
同

近淡海古事記
同

科野古事記
今信濃

上莞毛古事記
同

道輿舊事記
今隆興

能等舊事記
今登

多遲麻古事記
同

珠流河同書
今駿河

無邪志同書
今武藏

總古語拾遺
今上総下総

三野舊事記
日本靈異記今美濃

信農日本紀
同

下毛野舊事記
今下野

高志舊事記
古事記今加賀

賀我同書
同

且波古事記
同

稻葉舊事記
今因幡

稻羽古事記
同

游波古事記
同

阿波同書
今安藝

穴戸日本紀
同

粟舊事記
源註今阿波

土左日本紀
同

大角同書
今大隅

津嶋舊事記
今對馬

集嶋大和本記
同

伊吉舊事記
今壹岐

火舊事記
今肥前肥後

伊余舊事記
今伊豫

熊襲枝桑略記曰熊襲國鹿耳郡○今按和名類聚欽佐倭國無鹿耳郡○但

補古稱國後改郡郷説

葛城國	今大和國葛上葛下郡	穂國	今參河國宝飯郡	久努國	今遠江國山名郡久努郷
廬原國	今駿河國廬原郡	師長國	今相模國餘綾郡磯長郷	知々夫國	今武藏國秩父郡
須惠國	今上総國周淮郡	馬来田國	今上総國望陀郡	上海上國	今上総國海上郡
伊良國	今上総國夷瀨郡	武社國	今上総國武射郡	菊麻國	今上総國市原郡菊麻郷
印波國	今下総國印旛郡	下海上國	今下総國海上郡	新治國	今常陸國新治郡
筑波國	今同國筑波郡	茨城國	今同國茨城郡	仲國	今同國那珂郡
久自國	今同國久慈郡	高國	今同國多珂郡	菊多國	今陸奥國菊多郡
阿尺國	今陸奥國安積郡	伊久國	今同國伊具郡	漆羽國	今同國標葉郡
浮田國	今同國宇多郡	信夫國	今同國伊達郡	白河國	今同國分爲高野郡

須羽國	今信濃國諏訪郡	三國	今越前國淺井郡三國湊	角鹿國	今同國敦賀郡
江沼國	今加賀國江沼郡	羽咋國	今能登國羽咋郡	伊弉頭國	今越中國射水郡
久比波國	今越後國頸城郡	二方國	今但馬國二方郡	鴨國	今播磨國賀茂郡
明石國	今同國明石郡	大伯國	今備前國邑久郡	上道國	今同國上道郡
三野國	今同國御野郡	下道國	今備中國下道郡	加夜國	今同國賀屋郡
品治國	今備後國品治郡	大嶋國	今周防國大嶋郡	都怒國	今同國都濃郡
阿武國	今長門國阿武郡	熊野國	今紀伊國牟婁郡熊野	長國	今阿波國那賀郡
久味國	今伊豫國久米郡	小市國	今同國越智郡	怒麻國	今同國濃滿郡
風速國	今同國風早郡	波多國	今土佐國幡多郡	末多國	今後前夜須郡馬田下座郡馬田

宇佐國

今豐前國
宇佐郡

國前國

今豐後國
國前郡

比多國

今同國
日田郡

末羅國

今肥前國松浦郡
古事記末羅縣

葦分國

今同國
葦北郡

天草國

今同國
天草郡

阿蘇國

今肥後國
阿蘇郡

○右國造本紀所載也

許乃國

山城風土記○今山
城國宇治郡

信太國

同書

幡垂國

常陸國誌今常
陸國信太郡

補郡名後改文字說

山城墮國

日本紀
今乙訓

飽波

同書
今忍海

大和菟田

同書
今宇多

河内更荒

同書
今讚良

丹比

續日本紀
今丹南丹北

泉

同書
今和泉

甲可

鎮座傳紀同本錄
今甲賀

阿提

同
今有田

安諦

日本靈異記
同

丰魚市

大和本紀
同

播豆

三代實錄
今播磨

駿河安辨

駿河風土記
今安倍

玖珂

大内日記
今玖賀

英多

續日本紀
今英田

丹治比

日本靈異記
同上

近江栗田

日本紀
今無

紀伊伊刀

日本紀
今伊都

阿氏

續日本紀
同

尾張阿育知

同書
今愛智

葉栗

璽裏鈔
今羽栗

遠江長田

續日本紀後世
今三郡云

周防能野

續日本紀
今無

美作芒田

續日本紀○三代實錄
分芒田為芒田西芒東

備前藤原

續日本紀後
改藤野

備中 賀夜 備中風土記 今賀屋

龜石 日本紀 今神石

長祿年中大内氏日記 今豐浦郡歟

吉田 同書 今無

下総 岡田 延喜式。後 改豐田

安農 日本後紀 今無

越前 加我 日本靈異記。日本後紀曰 割越前國加賀江沼郡若賀岡

伊賀 敢 倭姫世紀神名秘書 今阿拜郡

隱 倭姫世紀鎮座奉縁 今名張

出雲 島根山岡 出雲小縁紀曰後分。島根楯縫秋鹿 三郡三郡之名詳干出雲風土記

備後 三次 三代實錄 今無

長門 豐東 ハウサイ。トヨ 今無

厚東 同書 今無

佐渡 鹿卧 扶桑畧記 今無

匱 通磨 續日本後紀 今近摩

伊豫 神野 日本後紀文德 實錄後改新居

伯耆 八橋 三代實錄 八幡畵

阿閉 神宮儀式帳 同

名壑 釋日本紀 同

後前 雛 日本紀 今那珂

摺 舸 後前風土記 今遠賀

後 三木 日本紀 今三池

志曰吉志麻後 世曰吉志見

皮志 同書 今合志

豐前 宮子 日本靈異記 今京都

日鷹 豐西記 同

碩田 豐後風土記 同

大隅 串卜 大隅風土記。今始 羅郡串伎郷歟

補 異邦書所載日本國郡等異字說

伊 蘓 同書 今怡土

御 牧 大内家日記。今無 但謬御公歟

肥前 耆資熊 萬葉集。今 杵邊。肥前地

肥後 熊 日本紀 今球磨

阿 宗 後前風土記 今阿蘇

豐後 日高 豐後風土記 今日田

肥 多 同書 同

日向 古庚 壺裏鈔 今兒湯

壹波 伊佐 壹波風土記。今壹 波郡鯨伏郷

讀著 武備志 讀文

竺後 同書 後後

非谷 武備志 肥後

蓬哥 武備志 豐後

都斯麻 北史 對馬

阿乃奴子 同書 編

阿賣介撒 同書 同國尼崎

元什麻舵 同書 備前牛窓。嚴鴻詰 記西國船路記作牛轉

阿家殺記 同書 長門 赤間關

法哈噠 同書 後前博多 八角島 元史 同

伊都 魏志 伊豆

甲安 續字彙補 甲斐 宋史

肥兒 同 杜祐通典 魏紫

竹斯 同書 編 伊勢山田

腰田 同書 和泉堀

沙界 同書 攝津須摩

素埋 同書 攝津須摩

素埋 同書 攝津須摩

素埋 同書 攝津須摩

素埋 同書 攝津須摩

竺前 四部稿選 魏前 兩朝平壤錄

甲裴 同 登壇必究

肥后 同 壹波

一支 同書 武備志

洞津 同書 同安濃津

瓢船各 同書 攝津兵庫

阿家世 同書 播磨明石

茄賣茄里 同書 同國蒲葺

阿介馬矢記 同書 同

花旭塔 武備志 同

法哥慈機 同書 同箱崎

阿麻國撒 蒼霞草。圖書編 肥後天草

牙子世祿 同書 同八代

也望加 同書 同山鹿

撒一基 同書 同佐伯

多藝 同書 大隅種馬

平壺 元史 肥前平戶

用懷世利 同書 同飽 田郡河尻

可苦嚨 同書 編 豐前小倉

都伊沙只 諸國記 同鶴崎

飛蘭嶋 三才圖會 同

昏陀 同書 同宇土

達加代 海東諸國記 同 國玉名郡高瀬

福乃 同書 豐後府内

鹿國什磨 圖書編 薩摩鹿兒嶋

○雜類 地理

肥後國 踊ヲリ山の徒

補
駿河富士の人穴乃從

補
倅勢圓鏡石の從

補 仔豆 圀 暮盤石乃硯

補工佐園潮石の役

補同國響石乃從

補 土佐國動石の役

補 淡波國葛田乃池の役

補 伊勢國井谷れ水の役

補 常陸國山崎の役

補 肥後國藤子木赤井の役

補 同國阿蘇郡小國の奇水の役

補 河波國界石の役

補 山雲國玉造の熱湯の役

○諸縣史記

廣益俗說辨殘編四十二目録

廣益俗說辨殘編四十二

肥後隈本 井澤節長秀輯録

○雜類 地理

補 攝津國琴引坂の説

俗説云攝津國琴引坂と云あり。折々琴のひびきあり。はなはたさきく

今按る。ふりてみる。ふりてみる。事言要云

引文海披沙曰安定西隴道一谷中有彈箏之

聲行人皆聞之謂之彈箏谷金陵谷寺東有

谷踐之空々然以手拍則應聲如琵琶亦曰

琵琶谷といふぐいなる

紀異志曰嵩山有玉女擣

圃杵聲○湘中記曰衡山如削絃歌之聲○追考慶陽府按琴台山畔有洞風來有聲彷彿若琴音故名

補肥後國踊ふ乃説

俗説云肥後國阿蘇郡踊ふ乃あり川乃を
い水神とすなり旱のときたれなり成るといふ
と云ふれよりみれ社を土俗踊堂と名づく
俗を草子にせりいふをこそとありはこれなり
今按ふ水經曰江水斯乃三峡之首也縣有一山
澤水神旱時鳴鼓請雨必應とありいふなり

補同國弥護ふ乃説

俗説云同國合志郡弥護ふ乃ありと云ふ風穴
ありと云ふありいはいふ乃た本紙人ありといふ
風ふと云ふ

今按ふ水經曰河水又南過河東北屈縣西
注曰河水南逕北屈縣西十里有風山上有穴如
輪風氣蕭瑟○廬山後録曰東塔廣福院寺
前山中有風穴故多風事文類聚云云曰方
山荊州府長陽南四面俱方有風穴夏則風
出冬則風入春秋分則靜又曰汝州東上有
風穴と云ふ同一

補 駿河富士人穴の説

建仁二年六月三日。源頼家の命によつて仁田郡
忠常。後者五人を具して。駿河富士の人穴へ入
り。翌日忠常穴より出て。松明をさぐりて穴へ
入り。路の向も知らず。足をとつて。時。小蛇
出て。足を噛む。切傷す。とゆふ。さほぐさ
るゝ。いある。あわ。若。さ。いある。あわ。その
下に雷乃とて。きく音。て。洞をほく。あわ。潮
く。て。少し。あわ。川向。松明の。光
あり。光。内。異。形の人。と。後者。い。と。ま。と。ま。

と。う。う。死。忠常。い。あ。あ。の。海。叙。を。川。
な。あ。い。ゆ。り。あ。作。と。ま。あ。り。
今。あ。あ。談。苑。曰。部。別。峯。水。場。往。歲。銅。釜。掘。地。
二十餘丈。即。見。銅。今。銅。釜。掘。地。釜。深。至。七。八
十。丈。役。夫。云。地。中。變。怪。至。多。有。冷。煙。氣。中。人。死。
役。夫。掘。地。而。入。必。以。長。竹。筒。端。置。火。先。試。之。如。
火。焰。青。即。是。冷。煙。氣。也。急。避。之。勿。前。乃。免。有。
地。火。自。地。中。出。一。出。數。百。丈。能。燎。人。役。夫。亟。以。
面。合。地。令。火。自。背。而。過。乃。免。有。臭。氣。至。腥。
惡。人。間。所。無。者。也。忽。有。異。香。芬。芳。鼓。亦。人。間。所。

無者也とあり富士の人穴なるに相あり

補 伊勢國鏡石の說

伊勢國度會郡宇治橋より十七八町程あり上
り西よりしてそり石面清淨明白ぬして
白く者全裸衣類の紋すそより草木の蔭に
かゝるはる也
勢陽記○追考雍州府志曰鏡石在洛北鷹
峰北麓峰下其石橫出二丈許高半之其石
面平如砥光如
鏡因名鏡石

今按ふ九域志曰月林國西南有怪石數百
里光明澄徹可監人五臟六腑謂之仙人鏡其
國人有疾輒照之遂知病處○林水錄曰廬山

東有石鏡照水之所出○事言要云曰微別

府石照山續溪東有石高二丈光可鑑物とわ

るい

追考雲林石譜曰永州祁陽縣語溪山岩之
側有立石色深青光可照物杭州臨安縣山

中一光石明

如鏡頗多

補 伊豆國碁盤石の說

俗從云伊豆國奈須浦一碁盤石あり石より

縦横乃盡わり碁の枰のぶくむく源賴朝蛭寫

るねをくどけくわくいて碁盤くくまふ

るの碁石なりと云

鈴秋津曰大明一統志曰碁盤山在天順府西三

十五里上有基盤石俗傳金章宗嘗宴於此倭漢俗稱相同

補土佐國潮石說

俗說云土佐國潮石くあり中くく水たまりあふるくく増減くく

今按々小洞天清錄曰宋趙希鵠曰紹興一士大夫家有異石起峰々之趾中有水應潮自生以之供研滴く同く

補同國響石く説

俗説云くくきくならくく金れくく

今按々小鄭常洽聞記曰南嶽响樓嶺有

響石呼喚則應如人共語南州南河縣東南

三十里丹溪有響石高三丈五尺洞二丈狀如

卧獸人呼之應笑亦應之塊然獨處亦貌

曰獨石也。始興記曰縣下流有一石室內在

懸石扣之聲若磬響十餘里くありくく

りり

補同國動石く説

俗説云大く六尺あるく四人ありくく一尺れくく

ゆいともて六尺のくくくくくくくくくくく

今按ふ小事文類聚要云曰嚴州府一指石在相廬西長一丈高五尺以手抵之則動人可多則不能移ハカスと同類なるべし

補 隱岐國葛田池の説

俗説云いづこ後鳥羽院隠岐國よりうつされしといふ。わづらひ海部郡森郷葛田池多る津遊の夕蛙鳴カイルナキ春風吹くひうけりけきと帝御新よいづちちる葛田の池の夕をくんと笑まぐさのい春風のよと思ふけり蛙をくさかーと云ふも四五歩もさるふちとてはのれぐさ

今按ふふりふ不諸國より肥後國菊池郡小も蛙さるさる一村あり録異記曰廬山西南七十里無水蛙之患とありと相同水經注曰江水在得廣武口江

浦也江之右岸有李姥浦浦中偏無蚊蚋之患矣

補 伊勢國井谷清水の説

俗説云伊勢度會郡小ありけ泉旱魃カンバツ少もいどと霖雨リンとありと

今按ふ小治聞記曰汾陽有天地在アリ燕京山エン上周廻八里陽早不耗陰霖不溢アフル○通鑑地理通釋曰天池在嵐州靜樂縣北燕京山上周廻

八里陽早不耗陰霖不溢○錄異記曰藥水
在房州西四十里水常數寸不耗不溢
補常陸國出河の說

傳云常陸國三日原乃東へなり。活水穴なり。
人馬の夢をささるば沸湯のささる

今按ふかじをいふ多し豊後風土記曰速見
郡玖倍理湯井在郡此湯井在郡西河有山

東岸口湯色黒泥土常不流人竊到井邊
發聲大言驚鳴涌騰二丈餘許且氣熾熱
不可向脛草木悉皆枯萎因曰温湯井俗語

曰玖倍理湯井○入蜀紀見曰巴縣不語灘々

險甚相傳舟過此戒人言々則水勢湍湧

不語則平易○林水錄曰温水出竟陵之新

陽縣東澤中口徑二丈五尺根津重沙端渾

可愛靜以察之則淵泉如鏡聞人聲則揚

湯奮發其熱可以燂雞○事言要云曰南京

鳳陽府吐泉壽州人至大叫大湧小斗小湧

吐之則湧彌甚又曰應天府喜客泉在茅山

客至則湧出故名又有撫掌泉聞擊掌當手之

聲則湧又曰廬州府笑泉人有笑漫泉益遽

沸。○潜確類書曰西寧衛有泉聞人足音即湧追考豐後風土記曰日田郡五馬山温泉其穴似井丈餘無知深淺水色如銀常不

流聞人之聲驚惶騰泥土一丈餘。○會津風土記曰東嶽熱湯在耶麻郡東嶽西腹自石邊二竅出焉硫黃出味酸能治積聚盛其間人多集于此或浴之飲之不

敢高聲語若喧話則雲霧驟起風雲暴至

補 肥後國麻子本赤井の説
俗伝云肥後國山本郡麻子本村一井あり地震ニで小水色甚赤一何なるニ乎

今按五雜俎曰黃山下温泉相傳朱砂在其下ニ一日有樵子早過之見泉水赤如血砂片若桃花者浮滿水面驚恠歸以語人翌日

鄰里競往見之則無所見矣レけさといふや

補 肥後國阿蘇郡小國の奇水乃從

肥後國阿蘇郡小國黒川村の内谷合一川あり水中に穴ありて水たわがふ少くもわがうどけ不レしつる鳥獸さうく死と人及牛馬狗ハ恙ニなニし

今按小雲僊雜記引鄴郡名録曰祕密

泉其塘社有一水方丈堂潔春夏不竭ヒテリスハ早則禱之應時雨下然牛馬猪羊飲之肥澤雞鴨鵝鴈飲之必死とありけさといふ

なり

補 河波國星石山の程

河波國勝浦郡星谷といふ所、星窟あり、二間四方なり、岩上の星ありて、石を穿て、窟あり、星の故、星石といふ。四國記

今按、小和漢より、星窟と云ふこと多し。尾張風土記曰、尾州玉置山有一石、赤星之所落也。麓有星池、星之常所宿也。亦有怪石、星之所化也。今猶星落焉。○夢溪筆談曰、治平元年、常例日、寓時天有大聲、如雷、大星

一震而墮地中、有一穴、竅極深、視之、星在其
中、久之、發其竅、深三尺餘、乃得一圓石、猶
熱、其大如拳、一頭微銳、名如鐵重、○續湘
山野錄曰、一夕有大星、墮於韓忠獻公園
中、樞馬皆鳴。○水經、廬水條下曰、湖中有
落星石、周圍百許步、高五丈、上生竹木、傳曰
有星墮此、因此名焉。○
他、今、玄相別錄、倉田星月、
井、今、もろの、星、を、落、て、入、り、
し、の、こゝ、に、
補 山玄國玉造熱湯乃説 附異水

俗説云、山玄玉造、河、あ、の、中、に、二、間、四、方、の、熱、湯

其水也。河を以て其のわきより熱湯の中
み入る。是とや。病をよむと

今按。小寒。温まど。り。水。わき。より。事。言。要。云。曰。漳州府李澳溪。漳浦西源出。梁山北。灌田千頃。又有綏女等五溪。亦有灌溉之利。内温溪在縣西。兩泉湧出。東西相對。一微煖。一極熱。惠州府三井。府城北三井相連。其泉一冷。一温。一熱。又曰。圓泉在析別永興。南泉半暖。半冷。々々。處極清。暖處極濁。けろく。ひた。く。く。○附異水。潯陽記曰。廬山西

南有康王谷。又有北嶺城。天欲雨。輒聞鼓角。簫管之聲。雞籠山下。洞中有數處。累石若有人。切水常深尺餘。朝夕輒有湧泉。溢出如潮水。時刻不差。朔望尤號為潮泉。○真行記曰。碧玉泉有曹溪有泉。甚清。一日三潮。以辰午酉三時。水必漲滿。之餘半涸。貴州省有泉。一日盈。一日涸。○志恠錄曰。深州東。麻縣中有水。影長七八尺。遙見人馬。往來如在水中。及至所。不見水。○廣輿記曰。四川夔州府在。多喜山。上有雌雄二泉。名温丹井。

春夏則左盈右竭秋冬則右盈左竭○涼州
記曰祁連山張掖酒泉二界之上東西二百
里南北百餘里山中冬溫夏凉水○方輿記
曰沸井丹陽縣南井有四二清二濁騰湧
滾沸晝夜不絕又有雙井南者赤北者
黃

廣益俗說辨疑編四十二終



